

自由と平等と平和

魚住東中学校 一年 松浦 心
まつうら こころ

「どんなに悲しくとも、どんなにつらくとも、戦争による死を美化してはならない。」これは、アンネが日記に書いた一文である。アンネ・フランク、彼女はユダヤ人として生まれ、ナチスによる忌まわしく、酷たらしい迫害の中、隠れ家で綴った七百八十一日間の日記は今も読み継がれ、人々に生きる力を与えている。

私はこれまでに、いくつかナチスや、ユダヤ人迫害についての本を読んでいるのだが、この一文を読んで、改めてアンネの願い、そして、戦争の恐ろしさを感じた。今、こうして作文を書いている間にも戦争によって苦しんでいる人々がいるのだろうか。そう思うと胸が痛い。私は、今も戦争が絶えないこの世界を見て、アンネはどう思うか考えるべきだと思う。きっと、アンネは平和な世界で自由に過ごし、皆平等に生きられることを心から願っていただろう。

「美化してはならない。」

この言葉からそう強く感じ、この忌まわしい出来事から、学び、もう二度と繰り返さないために、私にも出来る事があると思った。

とはいえ、平和な世界、自由や平等に生きられる社会を実現するのは、とても大きなことだし、とても難しいことだ。それでも私は、戦争という痛々しいことが、それほど遠くない過去にあり、そして、今もどこかで繰り返り広げられていると知ってから、争いのない平和な世界になるように尽くしたいと思った。私以外にも、そう思っている人はたくさんいると思う。私はそんな人を増やしたい。一人でも多く、戦争の悲惨さと、平和の大切さを理解し、平和のために努めたいと思う人が増えれば、戦争なんて無くなると思う。それが、私達が、平和のためにできる小さなことだと私は思った。そのために、私は、まず戦争や戦争での被害を知ってほしい。だから、戦争についての本を借りたり、場所を訪れて実感することを勧める。修学旅行での語り部さんの話を聞いて、今、自分が色んな事を学び、いろんな夢を持てることはとても幸せだったのだと感じるようになった。それから、戦時中の人た

ちは、国のためだからと言って、自分の生きたいように生きられずに亡くなったり苦しんだりしたのだから、その人達の方も学び、懸命に生きなきゃいけないと思った。私がこの文章の始めに提示した日記の一文は、アンネの戦争によって強制された死を美しいなんて言うのではなく、そんな戦争という事実をありのまま受け止め、二度と繰り返さないでほしいという願いだと思う。アンネはこんなことも言っている、

「戦争の責任は、偉い人たちや政治家、資本家だけにあるのではなくありません。責任は名もない一般の人たちにもあるのです。」

と。私は今まで、一般の人たちというのは、戦争で制限されたり、殺されたりしていて、「関係のない人たちが殺されるなんて酷い」という考え方だったけど、アンネは国のためと言って差別や戦争をすることが、一般人にも責任があると思っていたのではないだろうか。

今では、ドイツも、日本も平和だが、戦争や紛争が続いている国はまだ、たくさん在るはずだ。また、この日本でも、これから戦争が起きるかもしれない。そしたら、昔より、技

術が発展しているのもっとたくさんの方の被害になるだろう。それでも、今よりもっとたくさんの方が戦争の悲惨さを理解し、平和を心から願える人たちが増えれば、戦争をこの世からなくして、平和な世界、自由に、そして平等に生きられる社会を創ることがきつとできる。戦争のない平和で、お互いの良い未来にすることに、私達にも責任があるはずだ。私はそう信じる。世界で初めて原子爆弾が投下されたこの日本で、未だ差別や戦争が終わらないこの世界で、一度考えてほしい。